

20 参考文献

土屋の歴史を探るにあたり、次のような文献を参考にしました。

- (1) 新編相模国風土記稿 (しんぺんさがみのくにふどきこう)
- (2) 吾妻鏡(東鑑) (あずまかがみ)
- (3) 金槐和歌集 (きんかいわかしゅう)
- (4) 義経記 (ぎけいき)
- (5) 平塚市郷土誌事典 (ひらつかしきょうどしじてん)
- (6) 平塚市の史跡と文化財めぐり (ひらつかしのしせきとぶんかざいめぐり)
- (7) 小田原文庫刊行会出版物 (おだわらぶんこかんこうかいしゅっぱんぶつ)
- (8) 相模のもののふたち—中世を歩く—(有隣新書)
- (9) 源平盛衰記 (げんぺいせいすいき)
- (10) 平家物語 (へいけものがたり)
- (11) 承久記 (じょうきゅうき)
- (12) 北条五代記(ほうじょうごだいき) [後北条氏・小田原北条氏]
- (13) 古事記 (こじき)
- (14) 曾我物語 (そがものがたり)
- (15) 太平記 (たいへいき)
- (16) 保元物語・平治物語 (ほうげんものがたり・へいじものがたり)
- (17) 愚管抄 (ぐかんしょう)
- (18) 北条九代記 (ほうじょうくだいき) [鎌倉北条氏]
- (19) 神奈川県史 (かながわけんのれきし)
- (20) 平塚市史民俗調査報告書 3 —土屋・吉沢— 1983
- (21) 平塚市史(ひらつかし)
- (22) 土屋氏族の歴史—日本史における土屋氏族—(前編・後編)
(つちやしぞくのれきし)
- (23) 相模の札所巡り(さがみのふだしょめぐり)
- (24) 土屋誌(つちやし)

[解説]

- (1) 新編相模国風土記稿 (しんぺんさがみのくにふどきこう)

江戸幕府が編纂した官撰地誌で、126巻からなり相模国に関する地誌として作成されました。新編武蔵国風土記ができてから着手されました。成立は天保元年(1830)から天保12年(1841)で、編纂は間宮士信をはじめ幕府の史官26名が従事しました。わけても平塚関係は内山孝之助と浜中三平が地誌取調べ出役として調査を行い、各村から地誌御調書上帳を提出させています。文献や古文書を駆使し、「其伝あるも後世の偽造に出るは取らず」と傍証を行ないました。

(2) 吾妻鏡 (あずまかがみ) [東鑑]

東鑑ともいい、編者は未詳ですが幕府の官吏であろうとされています。全52巻からなり、源頼朝が兵を挙げた治承4年(1180)から文永3年(1266)まで86年間の鎌倉幕府関係の事跡を編年体に記録した歴史書です。成立は、前半の源氏3代の将軍分は13世紀中頃に、後半の藤原頼経以後分は14世紀初めと推定されます。内容は鎌倉幕府の創始期から中期まで80余年間の出来事を記述しており、平塚の鎌倉時代中期までの在郷武士団の動向や、頼朝の相模国著名神社仏寺に政子の安産祈願をするなどのことが載っており、当時の郷土を知るうえで有力な資料です。なお「あずま」とは関東地方をいい、京都からみて鎌倉・江戸をさしている。

(3) 金槐和歌集 (きんかいわかしゅう)

鎌倉右大臣の家集で、鎌倉時代の実朝(鎌倉三代将軍)の私家集です。1213年成立で、719首の歌集になっています。万葉調をとり入れた歌風で独自の境地を歌っています。「金」は鎌倉の鎌の偏を、「槐」は大臣の異称の槐門の槐を表しています。実朝の22才までの歌を集めたもので、春・夏・秋・冬・恋・雑に部立されています。歌集の中で平塚にちなんだものとして、相模川を詠じた(詩歌を、声を長く引いて読むこと)ものや、土屋宗遠のことが載っています。

『金槐和歌集』には、五首が次のように載っています。

「相州の土屋というところに、年90にあまれるくち法師あり。おのずから (たまた) 来り、昔かたりなどなし、ついでに、身の立ち居に堪えずなん成ぬる事を、泣く泣く申し出でぬ。時に老いという事を、人々に仰せてつかうまつらせし次によみはべりし」○我幾そ見し世の事を思い出の、あくるほどなき夜のね覚に。(程なく夜が明くると、程なく悟りを開く。つまり死とをかけた。)

○思い出の夜すがらに音をぞ泣く、有しむかしの世々の古ごと。

○中々に (なほかに) 老はばれでも忘れなで、などかむかしをいとしのぶらん。

○道とほし腰は二重にかがまれり、杖にすがりてここまでも来る。(鎌倉まで)

○さりとともと思うものから (まだまだと思っはいるものの) 日を経ては、次第次第に弱るかなしさ。

以上のように、金槐和歌集から宗遠のようすがうかがえます。

(4) 義経記 (ぎけいき)

判官物語ともいわれ、室町時代中期以前の8巻からなる作者不明の準軍記物語です。源義経の伝記物語として、父義朝の都落ち(平治の乱)から始まり、義経の幼少時代、そして奥州下りをする前半と、後半は平家を追討した後兄頼朝に追われ諸方へ逃げ、再び奥州に下り平泉の高館で自殺するまでの事蹟が記述されています。奥州から義経が兄頼朝の軍に参陣(富士川の合戦)すべく、相模の平塚を通過する記事が載っています。

(5) 平塚市郷土誌事典 (ひらつかしきょうどしじてん)

平塚市企画室市史編纂室で編集した唯一の郷土誌事典です。昭和51年(197

6) 5月1日の発行で平塚市の歴史・風土が一括掲載されています。

(6) 平塚の史跡と文化財めぐり (ひらつかしのしせきとぶんかざいめぐり)

平塚市教育委員会社会教育課で編集しました。昭和44年(1969)8月1日の発行で、土屋関係では10件が記述されています。

(7) 小田原文庫刊行会出版物 (おだわらぶんこかんこうかいしゅっぱんぶつ)

小田原の歴史を各編に分けてまとめたもので、土屋に関する記述が散見されます。「石橋山合戦前後」「小田原史跡めぐり」「小田原合戦」等が発刊されています。

(8) 相模のもののふたち -中世を歩く- (有隣新書)

作家永井路子の著書で、中世の相模の武士団について記述してあります。「源頼朝の旗揚げは、日本の中世の夜明けといわれている。だが、その主役となった東国、とりわけ三浦、大庭、波多野といった相模の武士団であった。かつて相模の田野を開発し、戦乱に巻き込まれていったもののふたちの面影を求めて、埋もれた館跡や緑陰の古社寺をたずね、激動の中世を生きた鎌倉武士の生きざまを、著者独自の視点から、ドラマチックに描いた書下し」といわれています。

著者は中世の歴史を中心にした著書が多く、「炎環」「北条政子」「歴史をさわがせた女たち」「鎌倉の魅力」「私のかまくら道」などがあります。

著者自身も、昭和52年(1977)ころ、この土屋を訪れ「土屋の館跡」「大乘院」等土屋氏にゆかりのあるところを見学していきました。

(9) 源平盛衰記 (げんぺいせいすいき)

鎌倉時代の軍記物語で、1247年ころ成立しました。作者は不詳ですが、平家物語の異本のひとつで48巻から成っています。平家物語の叙述を基として、源氏に関する記事を増補集大成したもので、したがって枝葉的な説話等が加えられ読物の興味を狙っています。構想の緊密を欠くなど文学的には平家物語に劣ります。

元暦元年(1184)佐々木四郎高綱が木曾義仲追討のため相模川を渡り京都へ赴いたこと、頼朝の挙兵のときから従った土屋三郎宗遠、岡崎四郎義実などの記事がみえます。

(10) 平家物語 (へいけものがたり)

鎌倉時代の軍記物語で、承久2年(1220)以前に成立しました。作者は信濃前司行長ともいわれており、12巻から成っています。

仏教の因果説と無常観を基調として、平家一門の栄華とその没落を描いたものです。和漢混淆文の一大叙事詩であって「平曲」として琵琶にのせられ琵琶法師により語られた物語で、後代の文学に多大の影響を与えました。源氏と平氏の全国的な闘争を取り上げていますが、反面人物の描き方が英雄詩的であり、文学と歴史が混合している物語です。文中、元暦元年(1184)4月、池大納言が鎌倉下向の時、頼朝が相模川の端(馬入川)まで迎えに来たとの記事があります。また、土屋氏に関する記述も

「巻の五 早馬」「巻の十 藤戸」等にあります。

(11) 承久記 (じょうきゅうき)

承久の兵乱記で、全2巻から成る戦記物語です。成立年代と作者は不明です。室町時代すでに世にあらわれていた保元・平治・平家の三物語と合わせて「四部之合戦書」とされており、また明德・応仁記と合わせて「三代記」とも称されていて、その存在が知られています。内容は承久の乱の顛末を叙述したものです。承久元年(1219)6月藤原頼経(鎌倉四代将軍当時2才)が都より下向の路次、相模国田村に5日逗留、7月19日鎌倉に入府したという記事があります。

(12) 北条五代記 (ほうじょうごだいき) [後北条氏・小田原北条氏]

小田原北条氏時代の見聞集で、作者は三浦氏の一族で小田原北条氏に仕えていた三浦五郎左衛門茂正(三浦浄心)です。北条氏滅亡後は故郷三浦に閑居し、のち江戸に移り慶長年間種々の述作をしました。この北条五代記は慶長19年(1614)に著作された「見聞集」より北条氏関係の項目を抜き出して作られたといわれ、五代にわたる逸話を集録しました。「福島伊賀守鱸を捕手柄の事」など平塚に関係したものが見られます。

(13) 古事記 (こじき)

現存日本最古の史書で、和銅5年(712)正月に太安萬侶が古事記の編集を終えました。相武国名と、日本武命東征伝説などが載っています。日本書記等は養老4年(720)5月に完了したといわれています。

(14) 曽我物語 (そがものがたり)

南北朝または室町時代初期の準軍記物語で、作者は不詳です。伊東・工藤両氏の領地争いに端を発し、河津三郎祐泰の遺児曽我十郎祐成・五郎時致が18年の辛苦の末、父の敵工藤祐経を富士の裾野において仇を打つという物語で、12巻からなっています。巻10～12は後日談になっていますが、巻10の1に五郎時致が「大磯・小磯・とがみ原・もろこし・相模川」等で敵を狙っていた苦衷のほどを語っています。なお、十郎・五郎は宗遠の妹満江御前の子ともいわれています。

(15) 太平記 (たいへいき)

鎌倉時代の軍記物語であり、小島法師の作といわれており、全40巻から成っています。北条高時の失政から建武中興を経て、義満将軍に至るまで50余年間の南北朝の対立・争乱を述べており、流麗な和漢混淆文で書かれ、詩情にはやや乏しいが平家物語に次ぐ軍記物です。

(16) 保元物語 (ほうげんものがたり)

鎌倉初期の軍記物語で、作者は「平治物語」と同一人と思われ、全3巻から成っています。成立は「平家物語」以前(承久2年1220以前)と思われ、和漢混淆文

で、源為朝を中心に保元の乱の顛末を描いています。

平治物語（へいじものがたり）

鎌倉初期の軍記物語で、作者は「保元物語」と同一人と思われ、全3巻から成っています。成立は「保元物語」の後で「平家物語」より前と思われます。和漢混淆文で、平治の乱の顛末を描いています。

（17）愚管抄（ぐかんしょう）

わが国最初の史論書で、慈円の著と認められ、全7巻から成っています。神武天皇から順徳天皇までの歴史を仏教的世界観で解釈し、日本の政治の変遷を「道理」の展開として説明してあります。

第一・二巻は皇代の年代記、第三巻から第七巻は本文となっており、慈円はこの愚管抄を書くにあたり「日本書紀」を基にしたといわれています。

慈円は、平安末期から鎌倉初期の僧であり歌人でもありました。

摂政関白の家柄である藤原忠通の子として、久寿2年（1155）に、生まれました。多くの兄弟のうち、4人が摂政関白になり、ほかの兄弟は法主となりました。当時は、王法（世俗）と仏法は牛の角のような存在でしたが、慈円はそれを越え第二の出家をして、天台座主に前後四度もなり、天王寺別当にもなりました。

勅諡号を「慈鎮」といい、和歌を父と兄の兼実に学び、後鳥羽院に接近し、俊成・西行とも親交がありました。作風は技巧にすぐれ、速吟・修辭の練達、表出の流麗が特色です。歌集に「拾玉集」があります。

北条政子とは同年代の人（2歳年下で、死亡年は同じ）で、誕生の翌年には保元の乱が起きました。

愚管抄は、承久2年（1220）慈円が65歳のときに書かれ、その翌年に起きる承久の乱に対する後鳥羽上皇への思いを、冥（みょう：目に見えない世界）と顕（けん：目に見える世界）により、「道理」という形で述べられています。

慈円は、嘉禄元年（1225）に70歳で亡くなりました。

（18）北条九代記（ほうじょうくだいき）〔鎌倉北条氏〕

北条九代記は、2種あります。

- ① 1183年から1332年の間の鎌倉幕府関係の重要事件を漢文で記した史書です。作者は不詳であり、上下二冊から成っています。
- ② 戦記物語で、伝えるところによると、江戸時代の浅井了意の著といわれており、全12巻から成っています。北条時政から高時に至る鎌倉時代の歴史を物語風に述べた書です。

（19）神奈川県歴史（かながわけんのれきし）（山川出版社）

中丸和伯の著書で、県史シリーズ14として発刊されました。

本書は神奈川県の歴史（原始・古代・中世・近世・近代・現代）と年表・沿革表・史跡文化財一覧表・文化財公開施設・公共図書館一覧表・年中行事・方言・民謡・特産

物・参考文献等が網羅されております。

(20) 平塚市史民俗調査報告書3 -土屋・吉沢- 1983

(ひらつかししみんなぞくちょうさほうこくしょ)

市史編纂室が昭和57年度(1982)に実施した民俗調査をまとめたものです。
土屋の民俗資料として大いに参考となる書です。

(21) 平塚市史

平塚市市史編纂室による「市史」で、全16巻から成っています。

第1巻～8巻は資料編、第9巻～11巻は通史編、第12巻～16巻は別編として民俗・考古・寺院・神社・年表・統計が網羅されています。古代・中世・近世・現代の平塚市を知るうえで貴重な資料です。

(22) 土屋氏族の歴史-日本史における土屋氏族-(前編・後編)

昭和53年(1978)1月15日に刊行された「日本史における土屋氏」に関する調査書です。京都市伏見区の土屋政一(土屋氏族史調査所)の著で、わが国における土屋氏族の存在を一般的な日本通史上にしたがって解明されたものです。

前編は「大和時代」から「室町時代」まで、後編は「戦国時代」から「近代・現代」までを記しています。

(23) 相模の札所巡り(さがみのふだしょめぐり)

昭和48年(1973)1月15日に刊行された「旧中郡における三十三番観音札所」の集大成ともいえる著書です。著者は、昭和33年7月から昭和38年8月まで土沢中学校の校長を勤められた、秦野市在住の片野福次氏です。本書には、相模三十三番観音の第28番の「正藏院」と第29番の「大乘院」が記載されています。

(24) 土屋誌(つちやし)

地元の山本藤枝氏によって編纂された、郷土史です。著者の実父山本良作氏は、郷土史家として数々の業績を残されました。

本書は、その集大成としてご息女藤枝氏の実筆により作成されました。

内容は、土屋の地理・歴史・史跡・民俗・農産物・植生物等が詳細に載っています。

特に、関東大震災時における資料は貴重なもののひとつです。

